
影ふみ遊び

岩崎星空羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影ふみ遊び

【Zコード】

Z6940D

【作者名】

岩崎星空羅

【あらすじ】

白菜、隼人、中学3年生のときの物語です。ホラー要素少ないけどぜひ読んで下さい！

無理だつてコトは 分かつてた。

儂いただの夢物語だつて 永遠にそれだつて思つてたのに。

神様：ありがとう。

私と隼人を助けてくれて ありがとう。

影ふみ？

ことの発端は担任の一言だつた。

「童心に返つて思う存分遊ぶぞー！」

この一言から、影ふみすることになつたのだ。

高校入試が終わつて、ひと段落着いた中3にとつてはうれしいイベントかも

なんだかみんなもわくわく気分だからよりいっそううれしいな。

「日 菜！」

振り向くといつものように、隼人。

私はただにつこり笑つて隼人の隣を歩いた。いつも…ただ隣を歩いていた。だから影はいつも隣同士だつたんだ。

先生も入つた、『影ふみ』

鬼は2人。

先生がホイッスルを吹く。その合図で、みんなは描いた円の中をひたすら真ん中へ向かつて逃げる。

小柄な私は結構有利だ。でも、今の時間帯は、夕方。それに冬。影は長くなる。

私もみんなの中に入つて頑張る。
気がつくともう鬼が交代になつている。早いな…。
でも…。おかしいの。

人が減つてゐる…

減るはずはない。

だって、円の中から動けない囚われの身である私たちが勝手に円外に行けば真っ先につかまる。

確かに人は減つてゐる

だって……先生がいないんだもん。

そのとき私の目をくらますものがあった。

夕日。

なんだか私の影が長くなる。それを捕らえようとする鬼。

夕日がなんだか地面を赤く…血塗られたように染めてゆく。

周りの人は…

一人、

二人、

三人…

どんどん減つっていく。なんで

どうやつて消えるの。

なんで消える必要があるの。どういう原理で消えるの？夕日が飲み込む？

この血塗られた地面の色は、実際の血？その血は、クラスメートのなの…？意味が分からぬいよ…。

「高川さん？捕まえた？」

背後から声がする。

ビクつとして後ろを振り返ると、そこには上林君…がにやりと笑つて突つ立つていた。

「…あ、え、と。うん。」

そういうて円外に出る。

え？

みんなの影が…ないよ？
とつさに隼人を呼ぶ。

「どうしたんだよ。」

「か、か、影が…な、ないの！」

隼人？

「ねえ、隼人！……」

私が叫ぶと隼人はゆっくりと倒れこんできた。

丁度隼人の顔が私の右肩に乗る。その状態が何だかうれしくて悲しくて…。なんで隼人がこういう状態になるの？

…みんな、どうしたの？

「日一菜一ちゃん あつそびましょ？」

背後に誰かから声がする。

振り向くと影だけが密集していた。

気がつくと隼人の面影がない。

何？

私をどうするき？助けてよ…。誰でもいいから…助けてよ…。

「あつそびましょー」

幽靈！？

幽靈なの？私をさらうき？

「いやああ

！！！！！」

私は一生懸命走った。たいそう服だから走りやすかった。でも影達は私の影を踏んで前に進めなかつた。

「いやいやいやいやいや

してつ…！」

叫ぶけどただ影達は私の影を踏んでずるずると影達の方へ私を連れてゆこうとする。

「やめてつ

！！！！！！！」

私が叫びわめいてから5分たつたときに偶然の奇跡が起つた。

暗くなってきたから学校の外の街灯がついたのだ。影は一時的に消えたので、私は思わず転ぶ。

そして、次また影が出来る前に私はとにかく逃げた。とにかく家まで走った。

人に声をかけられても一生懸命走った。家まで走った。びりしそうもないくらい走った。

「お母さんッッ！…………！」

ドアを開けてすぐ入る。

鍵はそのまま家の中に投げ入れて、カラソとした金属音が玄関一面に響きわたる。

リビングに急いで駆け込んだ。

でも……。

そこにお母さんの姿はなかつた。
ただテレビを見ている影の姿しか見当たらなかつたのだ。

モウ「ワレタシマッタンダ

私はそつと部屋へ向かってベッドにつづつた。

そのとき、

目が覚めた。

目に涙をうつすら浮かべた状態で、携帯の着信には、隼人から10件近くメールが入っていた。

その文面は全て、『白菜、大丈夫か?』それだけだった。

全部夢でよかつた。

(後書き)

あつけないこんな文章を最後まで読んでいただき
ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6940d/>

影ふみ遊び

2010年10月28日04時20分発行